

---

# ある晴れた日の午前

紅碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある晴れた日の午前に

### 【Nコード】

N8271Y

### 【作者名】

紅碧

### 【あらすじ】

冥王星の街路樹に雪降るクリスマス。ヒューマノイドサイボーグ犬のレオンハルトは、ハイト家の執事兼ボディガードだったが、自分もと人間である事実を知り、シルバーへの想いを断ち切るため、軍に戻る決心をする

西暦3087年12月冥王星トキオシティプラス 7

雪だ。

粉雪が舞っていた。冬の凍てつく空は抜けるように蒼い。その限りなく深い青から純白の羽のごとく、あとからあとから、冷たいものが降りてくる。寒々とした街を行きかう人々に何かざわめき浮き立つものを感じる。レンガ造りの石畳の街路樹から落ち葉が降りかかる。みな、それぞれの想いにひたすら生きる街角。

クリスマス音楽が街なかを流れていた。

コニファアの街路樹にイルミネーションがさまざまな色合いで星々のごとく煌めく。その間を、レンガ造りの石畳を、白いものがちらちらと降り積もる。

初雪が、今年は遅かった。

冥王星のここ、トキオシティプラス 7は、操作されたドーム都市とはいえ、太陽系一寒いのは変わらない。

雪の冷たさが身に染みた。サイボーグとはいえ、ヒューマノイドの彼には五感を感じる機能が備わっているからだった。

「なぜ行くの？何が気に入らなかったの？なにがあったの？」

エメラルドグリーンの大きくて綺麗な瞳にうつすらと涙が浮かんでみえる。光に透ける銀の髪、ぬけるような白い肌のほっそりとした肢体に薔薇色のドレスが似合っていた。

「『私はあなたのしもべです』って言ったじゃないか。『一生あなただけのしもべです』って言ったじゃないか。あれは嘘だったの？」矢継ぎ早に質問されても、レオンはただ「もうしわけございません。お暇をいただくこととなりました」とか「お別れです、坊ちゃん」としか言えなかった。

天使族の銀髪の美少年で、両性体エスパーのシルバーが、女性とな

り、そして、長い間執事として仕えていた、ハイト家の次期当主ブラックと結婚した。

それだけが理由だと、本人を前にして言うことはできなかった。護身用でなく、ときおりドーベルマン犬に変身して一緒にフリスビーをしたり散歩したりする、愛犬として接していた、天真爛漫とも言える、天然のシルバーが、レオンの本心に気づくわけがなく、ただ泣くことしかできないでいた。

「坊ちやま。いえ、シルバー様。7歳の時あなたがここに来られてから私は本当に幸せでした。なにも知らずにいたのなら、このままここで執事兼召使としてあなたがたのお世話をするのが私の唯一の幸せ、生きがいとなりうるはずでした」

レオンは過去形で話す自分にそのとき気づいていた。そう、いままでのことはもう、すでに過去のことなのだ。

「言ってる意味がわからない。理由がききたいだけなんだ、僕は」  
「私は、とおっしゃってください、これからは。あなたはもう女性なのですから。だんな様が私の代わりになるでしょう」

「ブラックは、しもべじゃないよ」

「夫婦は互いが支えあい、そうなるものなのです。かけがえのないものをあなたはみつめました。それは一つしか手には持つてはいけないものです」

シルバーはそれを聞くと黙りこみそれ以上にも言うことはなかった。

犬の脳を使ったサイボーグとして30年間過ごしたハイト家の執事の仕事を、レオンは今朝、自分で離職願いをして出てきたのだ。

太陽系連合は優れた軍用犬が死亡したとき、その身体を、人間型兼変身時は金色のたてがみを持つ黒のドーベルマン犬に代わる戦闘型サイボーグに改造した。そういう型の軍用犬サイボーグは多々いるが、なぜなのか自分は軍で10年程働いた後、31年前、突然、太陽系連合の主席家にボディガード兼執事兼召使として雇われた。主席の一人息子ブラックと15歳年下のパートナー、シルバー。

海王星でのある事件が片付いた後、婚約中の二人は法律よりも1年繰り上げ、半年前に結婚したのだ。

金髪にブラウン（茶色）のやさしげな瞳に、長身のスラリとした細身の体躯をおちついたグレーのダークスーツに身をつつんだレオンは眉目秀麗の若者で見た目は25歳くらいにしかみえない。

「きみが犬でないということ俺も知らされていなかった」

艶のある黒い髪。小麦色に日焼けした端正な横顔の主人ブラック・ハイトは、切れ長の深い宇宙のような瑠璃の双眸に、困惑をあらわにしていた。

「太陽系連合のやり方に俺も理不尽なものを感じることはあるが、これほどひどい怒りを感じたことはない。きみを引き留める権利は俺にはない」

「主席がなぜ大切な息子であるあなたのところ私を向かわせたのか。それはサイボーグ犬である私の脳が、例外として、人間ものだからです。本物の犬は忠誠心はありますがしよせんは犬ですから。人間とは違います。ですから犬機能を植え付けた人間の私をあてがわれたのでしょうか」

「こういう結果になってしまったのが残念でならない。シルバーがもし、10年前にここに来なければ、きみはここを出ていったらどうか？だが、あいつにそのような感情を持つ者をここにおくことは、だれであっても俺にはできないのが本音だ」

「私が犬であればよかった。犬でおしとおせばよかっただけのことです。落ち度は私にあります」

レオンは軍に戻る決意をしていた。主席のジュニアであるブラックに願い出て太陽系連合軍基地、アステロイドベルト・ゼロに向かう予定だった。

犬である私が坊ちやまを愛してしまったことが、そもその間違いであったのだ。自分の愛した、「少年であるシルバー」はもういない。恒星間宇宙開発のため実験体として研究施設で創られた天使族たちは両生体で、パートナーを決める18歳くらいになると、男性

か女性かに、自らが選んで変化する。シルバーはごくまれの自然出産で、母バイオレットは天使だが、父親はレッド・アーク博士は人間だった。17歳の天使族と人間の混血児は、少年から少女になり、32歳のかつて軍で「連邦軍の黒豹」と呼ばれ恐れられ男、今は穏やかな太陽系連合調査局長と結婚した。

「レオンハルト、きみの脳は人間だ。そう疑ったことはなかったのか？」

事実を知り、困惑するブラックの別れ際の言葉の意味に、気づかされたのは、シルバーを人間として愛してしまった瞬間だと思う。

事実を知らされたのが海王星での戦いの結果であったとしても、やはり彼は戦いの場に還る道を選ぶこととなる。それも31年ぶりに後悔はなかった。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8271y/>

---

ある晴れた日の午前

2011年11月24日18時50分発行